モヒカン/stay night

タケブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モヒカン／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ２５８０Ｒ

【作者名】
タケブ

【あらすじ】
冬木の魔術師、遠坂凛の呼び出したサーヴァント、それはモヒカンのヒャッハーな人だった…。

現在パソコンで大幅な改訂をしており半年は更新しない予定なのであしからず。

汚物登場［改訂版］（前書き）

一話と二話を合体させました。

汚物登場［改訂版］

「問おうテメェがオレ様のマスターかぁ？」

「違うと思います…」冬木の魔術師、遠坂凛は現れたサーヴァントに思わずそう答えた。

待ちに待ったサーヴァントの召喚。これから始まる聖杯戦争を共に戦い抜く相棒を呼び出すその儀式。十年間ひたすら待ち続けたそのときを前に彼女はどんな気高く、強力な英雄が現れるのか興奮を抑えられなかった。

だがいざ呼び出されたサーヴァントの姿ははっきり言って異常としか言えなかった。

革製に鉄のトゲトゲの生えた趣味の悪いジャケット、がに股に猫背気味のみっともない姿勢、顔の刺青、そして極め付きはモヒカンヘアー…

彼女は思った（なんでさ…）それは奇しくも後にこの聖杯戦争を共に戦う事になる少年の口癖だったのだがここでは割愛させてもらう。

「で、あんたはなんのクラスなの、て言うかナニモノ？」

なんとか気を取り直して彼女は呼び出したサーヴァントにそう訪

ねた。なぜならはっきり言って彼の姿は自分の中の英雄のイメージとは程遠く、下品かつ弱そうでどんな英雄なのか見当もつかなかったからだ。その問いに彼は意外と素直に答えた。
「オレ様を知らねえのもムリはねぇか…オレ様のクラスはアーチャー、真名はモヒカン、未来の英雄様だぁ覚えときな！」
「モヒカンって…あんたの親は何考えてんのよ…」
遠坂が思わずそう呟いてしまったのも無理はないだろう。どこに自分の子供にわざわざモヒカンなどという名前をつける親が居るだろうか。それを聞いて彼、モヒカンは怒る事なく答えた。
何でもないように言い放った、それはあまりにも衝撃的だった。
「今のオレ様と言う存在は言わばモヒカンと言う象徴によって束ねられた存在だ。つまりはオレ様は全てのモヒカンの英霊の集合体…あえて名付けるならカオス・オブ・モヒカンだぁ！」
「はぁ！？英霊の集合体って…どんなチートよ！そもそもなんでモヒカンなんてものが象徴として選ばれたのよ！ワケわからない！？」
遠坂は混乱しながらもモヒカンが英霊の集合体だと聞いてこの聖杯戦争はいけるような気がした。

だがこの後モヒカンのビミョーすぎるステータスを見て絶望することになるのであったがそれはまた別の話。

汚物登場［改訂版］（後書き）

更新は遅いですがこれからもよろしくお願いします

英雄と汚物［改訂版］

衛宮士郎は我が目を疑った、その余りに現実離れしたその闘いに。

片方は蒼いライダースーツのような服に深紅の槍を持ち、イカヅチの如き速さの突き繰り出す精悍な顔つきの戦士、野性的でありながら洗練された技で敵を翻弄する。

相対するのは黒い革製のジャケットを身に纏い武骨な大鉈と不細工な棘の生えた棍棒を手にしたひとをバカにしたような顔つきのモヒカンの男、一目に隙だらけとわかる構えに無駄だらけの動き、それだけ見れば自分の方がまだマシではないかとも思ってしまうほどだったが、何故かそこから繰り出される刃の軌道はその不細工で醜い動きからは考えられない見惚れるほど滑らかで美しいものだった。

速さだけ見れば槍の男の方が格段に上だろう。

技はというと自分は本来、技の事はそこまでわからないがモヒカンの男のひどい動きを見れば素人同然の自分でもどちらが上か一目でわかった。

だがそれでも闘いは互角だった。木をへし折り地面をえぐり空気を叩き切るそのパワー、あの一撃を受ければ流石の槍の男でも只では済まないだろうと思えた。さらに男の槍などまるで雨粒のように意に介さないその尋常ではない化け物じみたタフネス。今この瞬間だけならば二人は完全に互角だったのだ。

しかし徐々闘いに変化がつき始めた。　その持ち前のスピードで命を一刈りで奪う死に神の鎌を確実によけてゆく槍の男、いくらモヒカンの男に常識外れのパワーとタフネスがあろうとも、少しずつダメージを与えていく槍の男とはその部分から差が開いていった。

そして空気が変わる。

深く槍を構えその必殺の槍の真名を唱えようとする蒼い男、腰溜めに構えて何かをしようとする黒い男。

決着が着こうとしていた。

その頃ヒロインは完全に忘れさられていた。

英雄と汚物［改訂版］（後書き）

この小説のコンセプトは主人公なのに主人公要素が無い主人公です。パワーとタフネス以外取り柄が無い典型的な噛ませ犬のゲームのボスのようなモヒカンが主人公達属性達とどう戦うか、期待してください。

え？なんでモヒカンがアーチャーかって？それはアーチャーの利点を潰すためさ！

スピード？テクニック？頭脳？戦車に装甲車がかなうわけないぜ！踏み潰してやるぜ

汚物の夢

男は夢をみていた。

ただひたすら平穏な物足りなさを感じながらも特に不満も無かった時代。
グチャグチャの絵の具のような色の時代

国家・家族・友・価値観、全てが崩壊し灰となったあの日。
ガラスのように全ての色が消えた日

砂嵐吹き荒れる赤い大地を仲間達と疾走し、常に渇きを感じながらもどこか満たされていたあの頃。
赤い時代

全て内容が違うがどこか似ていたそれらの夢を千回ずつ。
そして夢の最後は男にとっては全て同じ内容だった。
例えば不動明王のような圧倒的な拳士に・薔薇のように華麗な剣士に・わずか数名で数百人を倒した兵士に、それらの戦士に一太刀浴びせるもまるで意に解さんとばかりに倒される。
そんな内容の夢を実に千回。

そんな記憶は男にとってはどうでもいい事だった。
確かに自分は「アイツら」から生み出された存在だが、自分は決して「アイツら」じゃない。

自分という確かな一つの意思を持つ個人だ。
だからこそあの日を変えたいとか、あの時代に帰りたいとか、新たな生を得たい、そんな願いは無い。
全てどうでもいい事だ。

だがもしも願いが叶うならそうだな、オレはあの夢の最後に必ず現れる、あの豪傑達のように　『英雄』　そう呼ばれる存在になってみたいもんだ。

そして男は目覚める　。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2580r/

モヒカン/stay night

2011年10月8日11時46分発行